

風の電話

をたどって

3

tadotte@asahi.com

私は東日本大震災の直後から岩手県大槌町に3年間駐在し、その後も東京と往復しながら取材を続けました。「風の電話」がある佐々木格さん(70)の庭もしばしば訪ねました。おとぎの国のような庭に魅せられる一方、「違和感」も残っていました。被災地では今やっと町を再建する工事が始まったところです。

今年6月、写真家の藤原新也さん(71)にお話をうかがいました。藤原さんは昨年、「風の電話」にひかれ、何度か佐々木さんの庭を訪れてい

ます。私は素直に自分の気持ちをぶつけました。

藤原さんは最初、「できすぎた話」だと思ったそうです。被災地を十数回訪れ、「とってつけたような」記念施設やイベントをいくつも見て来たからです。

それでも見てみようと思ったのは、電話は、そもそも震災があつたから造つたのではないと知ったからです。

2009年12月、佐々木さんのいとこの武川博久さんが、がんでなくなりました。病気が末期になった頃、佐々木さ

魅力は解き明かせた でも…

んは、残されることになる武川さんの妻と2人の娘のことを思いました。会えなくなっても、家族をつなぐものを造れないか、と考えたのが「風の電話」でした。

電話ボックスの中に掲げら



武川博久さんの遺筆となった「風の電話」の詩。ボックスの中に飾っている

れた筆書きは、佐々木さんが考えた詩を、書家だった武川さん自身が書きました。モルヒネの投与で意識がもうろうとしているため何度も書き損じながら仕上げましたが、しっかりした筆致です。

調達してきた電話ボックスに屋根をつけていると震災が起き、作業を中断しましたが、震災後、1カ月ほどして完成しました。

藤原さんはその庭の光景を実際に見た瞬間「これは本物



「TSUNAMI」のラストシーン。「風の電話」を題材にする＝北山道子さん提供

だ」と確信したそうです。「佐々木さんの念を感じた。花の表情が違う」佐々木さんは、大槌ゆかりの宮沢賢治の歌碑を町内に建てるために、「風の電話」の曲を作りCDにして売ろうという計画を協力者と話し合っていました。藤原さんは「ジャケット写真を提供したい」と申し出ました。

ピュリツァー賞の受賞歴もある米劇作家二ロ・クルズさん(55)も、この庭を訪れて触発された一人です。米マイアミ大准教授の北山道子さん(42)と一緒に、被災者が実際に語った言葉だけで芝居を作ろうと、12年5月、大槌町や釜石市で20人以上と向き合いました。その一人が佐々木さんでした。